

古代教会スラブ語の分詞について 福音書テキストを対象に

恩田義徳

本研究は古代教会スラブ語の分詞を例として、言語の通時的変化と言語使用者との関係について考察するものである。

古代教会スラブ語（OCS）はスラブ世界最古の文語である。9世紀中ごろにギリシア人聖職者コンスタンティノス＝キュリロスとその兄メトディオスによって制定され、ギリシア語聖書をスラブ語へと翻訳するために使用された。OCSは東方正教会の教えとともにスラブ世界へと広がり、およそ2世紀半の間スラブ世界の共通文語として用いられた。スラブ世界へと広がったOCSは各地でそれぞれの方言を取り込み、12世紀初頭にいたって言語としての統一性を失う。そのため定義上、下限は1100年に設定されるが、これは人為的なものである。12世紀以降、OCSが方言を取り込んで成立した地方的変種はロシアやセルビア、ブルガリアではそれぞれの地域で「教会スラブ語」として東方教会のスラブ式典礼の基礎をなし、また文章語としては各スラブ諸語の標準語成立にも影響を与えるなど、スラブ語の歴史上重要な役割を果たした。

OCSはまた、スラブ基語に匹敵する古さを保ち、いくつかの方言的特徴を除けばかなりの程度までスラブ基語と同じものになったと推定されている。スラブ基語には一切の文字資料が残されていない点を考えると、検討に値するだけの資料を残している点にOCSの重要な意義がある。

OCSはロシア語の標準語の歴史を考えるとときにも欠くことのできない要素である。OCSは10世紀初頭にはブルガリアを経由して当時のキエフ・ルーシへともたらされる。OCSはこの地での方言的特徴を取り込み、急速にロシア化し、ロシア教会スラブ語、すなわち古代ロシア語（OR）が成立する。このORは17世紀にいたるまでキエフ・ルーシ、後のロシアにおいて唯一の文章語として文学作品や実務的文書に使用される。18世紀、国家の言語としてのロシア語の整備が進むと、OCSの流れを汲むロシア教会スラブ語は雅歌や頌詩などに用いる文体の言語として地位を確立し、その後の19世紀の、広い意味での現代ロシア語の成立に際しては標準語のひとつの要素として組み込まれることとなる。

本稿でははじめOCS研究のさいに把握しておくべき情報についての整理を行った。1章ではスラブ語派を軸に、言語の歴史的文化的経緯、その中におけるOCS位置、現

代のスラブ諸語について述べた。2章では OCS 成立の背景について、コンスタンティノス一代記、メトディオス一代記の記述を参照し、OCS 成立の契機はスラブ人への東方教会の布教であり、ギリシア語とマケドニア方言のスラブ語をもとに制定されたことを確認した。その後の兄弟の布教活動についても簡単に触れ、当初目的としたモラビアでの布教の失敗や、ブルガリアでのスラブ書記文化の発展、OCS のロシアへの伝播について概観した。3章では OCS の言語としての側面に焦点を当て、文字と音、名称と定義についての基本的な情報を整理した。また、OCS の資料についての文献学的情報をまとめた。4章では本研究で使用した電子コーパスヘルシンキ・キリル・メトディオス・コーパス (CCMH) について紹介し、それを実際に研究に用いて得られた知見から、特徴と問題点を指摘した。具体的にはテキストの誤植の多さ、つまり精度の低さを問題とし、これは是正するためには実際にコーパスを使用すること、それによって誤りを訂正し、精度の向上をはかるという方法が妥当であると論じた。そのためには訂正された(確認された)誤植をコーパスにフィードバックするシステムが必須であり、これをもたないことが CCMH の改善点であると指摘した。本研究ではこの CCMH をもちいてマリア写本、ゾグラフィオス写本、アッセマーニ写本、サバの本の福音書テキストの平行テキストを作成した。その際、利便性の向上のために文字の置換え、テキストの体裁改変などの処置を行い、訂正した翻字表も作成した。

5章では分詞の標準的・規範的な用法についての記述を行った。分詞は動詞から派生し、形容詞と同じ変化語尾を有する形式である。そこで、動詞と形容詞の文法カテゴリーについて確認し、それらが分詞にどのように引き継がれているかを確認した。特に分詞は能動・受動態については動詞よりもはっきりと区別することができること、分詞の時制は動詞のそれと異なり、現在は述語動詞と同時に起こる動作を、過去時制は述語動詞よりも先行して起こる動作をあらわす、相対的な時制であることを確認した。また、短語尾形・長語尾形の区別について注目し形容詞との差異に注意しながらその記述を目指した。OCS の分詞について考えるとき、特徴的なのは用法の幅が広いことである。分詞は名詞に対して形容詞のように修飾をする定語的用法、述語動詞によって表される動作に付随する動作をあらわす述語的用法、また特定の動詞の補語として使用される補語的用法のほか、単独で名詞として用いられたり、byti とともに進行中の動作をあらわしたり受身の構文を形成したりする。分詞の短語尾形と長語尾形についてはこれまでの先行研究における記述に十分でないところが認められた。短語尾形と長語尾形は形容詞にも存在するカテゴリーであり、従来それは定性をあらわすとされてきた。

しかしこれは分詞においてそのまま当てはめることはできない。分詞の用法ごとに短語尾・長語尾がどのように分布するかをテキストの用例にあたって傾向を出した。この中で、分詞の用法の区別があいまいである部分について考察し、分詞と述語の動詞が並列してあらわれる用例をパラレルテキストから確認し、その場合の分詞がすべて短語尾形であることを指摘した。つまり、述語的用法の分詞は短語尾形であるという点を具体的な用例に基づいて明確にした。

6章では言語の変化と言語使用者の関係について、OCSの分詞を例として検証した。言語変化の要因について、はじめにフレエの説を紹介した。言語の変化は言語機能における欠陥を是正するために生じる諸種の欲求によって引き起こされること、しかしその変化は従来の規範を満たさないものとして「誤用」と判断される。この誤用はしかし、言語変化あらわれであるというのがフレエの理論である。フレエの理論は言語変化に言語の使用者を組みこんだ点でユニークである。しかし、言語の変化するベクトルについては理論化されているが、言語を変化させない力についての言及はされなかった。

この点についてOCSを対象とする場合、次のような点に注意が必要である。つまり、現存するOCSテキストはすべて筆写によるものであり、言語の使用者である写字生の規範意識はコピー基のテキストに向くということである。それが確認できる例としてイェル(ѣ・ѥ)についてとりあげた。イェルはOCS成立時には弱化母音としての性質を持っていた。時代が下ると音に変化が生じ、10世紀末までに強い位置での完全母音化、弱い位置での脱落が起こるようになった。しかし写本のテキストにはこの音変化は部分的にしか反映されていない。これは写字生たちが伝統的正書法を重んじ、テキストをなるべく変えないようにするというコピー元へのある種の規範意識が働いた結果と見ることができる。この規範意識が行過ぎるあまり、本来必要のない箇所にもイェルを挿入してしまう現象も見られた。

同様の規範意識を観察するため、5章までで見た述語的用法の分詞について着目し、それが本来不必要と思われる接続詞を伴って、述語動詞と並列的に結ばれる現象を取り上げた。

例：

І ОТЪВѢШТАВЪ. І !!ГЛА ЕМОУ ІНС. ЧЕСОМОУ ХОШТЕШИ ДА СЪТВОРѢЖ ТЕБЪ.

[そこでイエスは彼に語りかけて言った、「何をして欲しいのか。」] (Mk 10:51, Zog)

この分詞＋接続詞＋動詞という構造はOCSにおいてはまれで、頻度の観点から見れば、標準的ではない形式である。これが生じた原因を探るべく、以下のような仮説を立てた。

仮説1：意味的に類似する構造を混同した

仮説2：元のテキストに忠実であろうとする規範意識がはたらいた。

この仮説の検証のため、例文のような構造をパラレルテキストで採集し、得られた15例から以下の事実を得た。

- a) 過去分詞で多くおこる。
- b) 語順は分詞＋動詞の順でおこる。
- c) 個別の文献でおこる場合とそうでない場合がある。

a)と b)からは動詞の過去時制をもちいた場合と動作の順序という点で意味的に類似する構造で起こっていることが確かめられた。c)についてはギリシア語のテキストとの比較が必要となった。結果として、本研究で問題としている現象は15例のギリシア語のテキストにおける該当箇所では確認されなかった。これは問題の構造がギリシア語から直接引き継がれたものではなく、OCSテキストの筆写の過程でテキストに紛れ込んだことを意味している。

つまり、問題の構造は写字生が類似する構造を混同し、しかし一方ではコピー元のテキストにたいして規範意識を持っていたために生じたと考えられる。